児童家庭支援センターによるヤングケアラー支援の実施および検証事業総括：

横浜　みなと

当センターでは、ヤングケアラーに相当するこども達への支援も行っている。そのこども達と家族は「どのような困り感があるのか」、「何が必要なのか」、それらに対して「当センターは何ができるのか」といった支援の困難さに直面しており、暗中模索の最中であった。そのような中、本事業のことを知り、支援の端緒を掴む思いで応募し、幸いにもメンバーに加わることができた。二年間という限定された期間ではあるが、我々は現場での支援に携わりながら「ヤングケアラーとは」、「ヤングケアラー支援とは」という根本的な課題について常に問い続けながら実践を積み重ね、支援を紡いできたように思われた。

【実践】

一年目の一例として「母を亡くし不登校傾向で精神的にも不安定な状態の中、弟の面倒を見なければならない姉」を挙げる。手探りではあるが実際に支援していく中で得られた成果として以下の取り組みがある。これまで誕生日もクリスマスのイベントも家族で祝ったことがなく、いつも暗い表情だった子に対し、クリスマスプレゼントを用意し、ケーキを一緒に作り、クリスマスを祝う計画を立てた。当日は、こども達に内緒で病気がちである父親にサンタクロースになってもらった。父親もノリノリで楽しそうにしている姿を見て、こども達も笑顔いっぱいであった。初めての楽しいクリスマスの思い出を家族全員で共有することができた。

また、映画館での映画鑑賞も初めての体験であった。ストーリーがこどもとオーバーラップするような内容であり、映画を観ながら涙を流すなど自己投影する部分が大いにあり、心のケアにつながったように思われた。

他にも、亡くなった母との思い出の場所に行ってみたいなど、家でも当センターでもなく、こうした体験を通して自分自身の気持ちに目を向けるきっかけにもなったと感じられた。映画鑑賞や外食など、この事業の予算を活用することで、当センターでは語られなかったことを聞くことができた。こどもや家族に、とても良い反応が見られた。個々の支援に加えて、家族を一体で考える「家族まるごと支援」の必要性を学んだ。

二年目の一例として「行政の介入が困難だったが、本事業を通じてつながった家族」がある。このケースは、一年目の後半にヤングケアラー支援として行政より依頼があり、予算を活用しての食支援を実施することから始まった。

食支援の提案に対して拒否を示されなかったこともあり、当センターの関わりが始まると少しずつ家庭の状況が把握できるようになった。この家族は行政の担当ケースワーカーから「つながったのが奇跡」とあったほど介入が困難であったが、当センターでの支援を通じて、母は「（他者に）頼っていいんだ」と思えるようになってきた。次第と行政の支援も受け入れることができるようになり、弟の保育園入園も可能となった。母と妹は当センターとつながり順調に関係構築が進む中、ヤングケアラー当事者である姉への支援が進

まなかった。母は、姉に対して「自立しているから、特に問題がない」と言い、本児への困り感もなく支援の提案ができないでいた。

五月に事例発表をし、参加者での検討と先生方から助言を頂くことができた。「第三者が家の中に入ることに対してすごく拒否的になることは一般的である」と助言を受け、姉との関係構築にはこまめなアプローチが必要と感じ、少しずつだが、アプローチを続けた。その結果、誕生日プレゼントをきっかけに関わることが可能となった。インテーク面接では「家では、言いたいことは言わないで我慢している」と話し、家庭では良い子を演じている様子が窺えた。将来の夢や志望校について聞くと「わからない」と話していた。

予算を活用して洋服を一緒に買いに行く等、定期的に関係構築に努めるうちに「〇〇になりたい」、「〇〇か△△で悩んでいる」と具体的に相談してくれるようになったのが 12 月に入ってからであった。今後も相談先として定期的な関わりを続けていくが、事例検討時に「ここにどう支援者が伴奏できるかが課題である。自分自身の人生が描けるのかというところを、優先順位として重きを置く必要がある」と斎藤先生より助言を頂いており今後の支援に活かしていきたい。

ヤングケアラー支援の一番の要は「親支援」という点であるが、親が安心して支援を受けることや、「助けてもらえる」、「自分のことを相談していいんだ」といった支援者や社会に対する信頼感がなければ、ヤングケアラー支援にもつながることが難しいと学ぶことができた。

【事例検討会】

定期的に行われた事例検討会は、大変有意義な時間であった。当センターも含め各センターの事例は「虐待」、「こどもも家族も障害や疾病を抱えている」、「不登校」、「経済的な理由」、「ひとり親世帯」、「多子世帯」といった様々な課題が重複しており、一見するとヤングケアラーの課題があるかどうか、見え辛く、かつ深刻なケースが多かったように思われる。それ故に、どのケースもヤングケアラーの課題の見えにくさがあるからこそ支援につながりにくいといった難しさを有していることを、改めて目の当たりにした。

各センターの取り組みや先生方の助言から「ヤングケアラーの課題を見出し、ニーズをどのように掘り起こしていくか」、「どのように関係を紡いでいき、支援につなげていくか」を具体的に学ぶことのできる貴重な機会となった。そのような意味において、ヤングケアラーにまつわるアセスメント力や支援の方向性を定めていく力が養われたように思われた。

また、各センターでのケースや取り組みを伺う中で、どのセンターも「どのようにアセスメントをしていくか」、「どのように支援方針を立てるか」、「何を実践するか」、悩み抜きながら最大限できることに取り組んでいることを知ることができた。現場ならではの共感できる点も多くあり、エンパワメントされた時間でもあった。

【今後の課題】

「他の社会資源を使いながらどのような支援ができるのか、関係機関との連携を図りな

がら考えていく」という課題については、発展途上である。残念ながら本事業は今年度で終了するが、ヤングケアラー支援はこれからも続く。ヤングケアラーのこどもたちの居場所を増やす、地域のこども食堂や学習支援、民生委員とのつながりを持つなどアウトリーチを進め、支援ネットワークを構築したいと考えている。

関わらせて頂いた家族の方々が肩の荷を下ろしほっとされた瞬間に立ち会えたこと、そしてこども達が屈託のない笑顔を浮かべていた姿を見ることができたことは、支援者にとっても忘れがたい瞬間となった。

課題は山積しているが、今後もこども達の笑顔につながるよう、本事業を通して得られた知見や経験を主軸に据え、引き続き支援を行っていきたい。